

側妃のお仕事は終了です。

2

◆シェイル◆

アミュエラの夫。イスワール伯爵。
レディーナ王国の外交官を務め、
若くして家督を継いだ優秀な人物。

◆アミュエラ◆

冷遇された側妃としての過去を捨て去り、
レディーナ王国の文官として
第二の人生を歩んでいる。
基本的に冷静沈着だが、目的のためには
手段を選ばない大胆さも併せ持つ。

Characters

◆ビクトリア◆

無口かつクールな王太子妃。

◆キャサリン◆

どこに出しても恥ずかしい
わがままプリンセス。

◆カレン◆

アミュエラの世話役を
任されたメイド。
いつも明るいが、
失敗も多いドジ娘。

◆ディオン◆

イスワール王国の王太子。
自分を中心に世界が
回っていると思いつている
傲慢な性格。

◆ロイド◆

オスター公爵。
愛妻家と
思われているが……？

目次

側妃のお仕事は終了です。 2

それぞれの物語

側妃のお仕事は終了です。

2

プロローグ

「イブリード王国法第七十二条に基づき、被告人に判決を言い渡す」

その日、イブリード王国中央裁判所では、ある事件の裁判が行われていた。

広々とした法廷に、ガベルの乾いた音が反響する。肌を刺すような静寂の中、裁判官は毅然とした面持ちで判決を述べる。

「主文。被告人アニュエラ・イスワールを、我が国の王城への不法侵入及び不正入国の罪に処し、これを有罪とする」

その瞬間、傍聴席は堰を切ったように、ざわめきがあふれ出た。

「こりや明日の新聞の一面は決まりだな」

「不逞の輩ならいざ知らず、由緒ある伯爵家の方が不法侵入だなんて。呆れて言葉も出ませんわ」
好奇に満ちた視線が、ひとりの女性へ向けられる。

年齢は二十代前半だろうか。ステンドグラスから差し込んだ日光が、彼女の燃えるように紅い髪を照らしている。力なくうなだれているせいで、その表情を窺い知ることはいかない。

傍聴席の最前列でひとりの男——シェイル・イスワールが漏らした小さなため息は、周囲の喧騒

にあっけなくかき消されてしまう。

（これであなたは、この国の罪人というわけだ）

これはひとつの国が崩壊へ向かう物語の、ほんの序章に過ぎなかった。

第一章 イブリード王国

遡ること約一ヶ月前。

レディーナ王城の一室には、書類の山と格闘するアニユエラの姿があった。

「今月も穀物類の物価上昇は避けられそうにありませんわね。領主たちも対策を講じてはいますけれど、王城からの支援も本格的に視野に入れるべきかと思えますわ」

アニユエラの提案に、隣にいた文官も厳しい表情で首を縦に振った。

「おっしゃる通りです。このままでは、ただでさえ苦しい庶民の生活が立ち行かなくなります」

「飢える民が増えれば、治安の悪化も免れません。何より、この高騰がいつまで続くかわからないのが一番の懸念ですわね」

アニユエラ・イスワール。

かつて彼女は、ミジウム王国で王太子サディアスの正妃となる予定だった。しかし、サディアスがミリアという令嬢を正妃に据えたことで、側妃の座に追いやられてしまう。

周囲から理不尽な扱いを受け、ついに我慢の限界を超えたアニユエラは、側妃としての責務を完全に放棄しようと決意。

紆余曲折の末に隣国レディーナ王国に渡ったのは二年前。現在は文官として第二の人生を歩ん

でいるのだが……

（お父様の領地もかなり行きづまっているご様子。一刻も早く事態を収束させたいのだけれど）

ミジウム王国の一部とレディーナ王国の合併。

それによる多少の混乱はあったものの、ようやく落ち着いたかと思えば、この未曾有の物価高騰である。

（まずは王城で備蓄している穀物の放出……それから、特に困窮している地方への補助金についても陛下に掛け合ってみないと……）

対策の遅れは、王家への不満につながる。それを防ぐためにも、早急に支援案を練らなければならない。

焦燥感に駆られながら書類に目を走らせていると、執務室の扉が小さな音を立てて開いた。

「アニユエラ様、ただいま戻りました」

精悍な顔立ちの青年がうやうやしく頭を下げた。

その姿に、曇っていたアニユエラの顔は陽が差したように明るくなった。何せ、夫とこうして顔を合わせるの、一週間ぶりのことなのだから。

シェイル・イスワール。

若くして家督を継いだ彼は、レディーナ王国の外交を担う有能な文官だ。そして、かつてアニユエラの文通相手として心を交わした仲だった。

アニユエラとサディアスの婚約を機に、その文通は途絶えていたものの、アニユエラがレディー

ナ王国へ渡ったことで運命の再会を果たす。

その後、一気に距離を縮めたふたりはめでたく結婚。現在は公私ともにかけがえのないパートナーとなっている。

「おかえりなさい、シェイル様。お帰りは明日ではなかったかしら？ 予定を早めましたの？」

「はい。陛下へ一刻も早く会談の報告をしたく、御者に無理を言っただけで済ませました」

少し疲れた顔をしながらも、シェイルは穏やかに答えた。そして何かを言いたげに、アニエラをじつと見つめる。

（……本当は私に早く会いたかった、なんて理由も含まれているのかしら）

決して公私を混同することはない。共に文官として働くことと決めたとき、ふたりでそう約束したはずなのに、隠し切れない想いが滲（にじ）んでしまう。そんな彼の不器用さが、アニエラには少しだけうれしかった。

それから二時間後。

シェイルが国王への謁見を済ませた頃には、空はすでに藍色に染まり始めていた。

アニエラも一日の仕事を終え、ふたりで王城をあとにする。本当はまだ業務が残っていたのだが、「旦那様がお戻りなのですから」と同僚たちが気を利かせ、代わりを引き受けてくれたのだ。

（気持ちはいけれど、なんだか申し訳ないわ）

少しの気恥ずかしさを抱えながら、アニエラは馬車に揺られていた。向かい側に座るシェイル

も同じ気持ちのようで、どこかそわそわとして落ち着かない様子だ。

「あちらの国はいかがでした？」

「あ、えっ……何がですか？」

突然声をかけられて驚いたのだろう。窓の外を眺めていたシェイルが、慌ててアニエラに顔を向ける。その様子があまりにおかしくて、アニエラはつい噴き出してしまう。

「いやですわ。お仕事の話に決まっているではありませんの」

「ああ……難航するかと思われましたが、あちらが譲歩してくださったおかげで、思いのほか順調に進めることができました」

「あら、それはよろしかったですわね」

「最終日は観光案内までしていただいて……」

仕事の話になり、調子を取り戻したようだ。その後もシェイルは馬車が邸宅に到着するまで、淀みなく語り続けた。

（根っからの仕事人間よね）

アニエラたちの住まいは王都のタウンハウスにある。さほど広くはなく、庭園さえ備えていないが、実用的でこぢんまりとした一軒家だ。

「おふたりとも、お帰りなさいませ」

ドアノックを叩くと、年配の女性がふたりを笑顔で出迎えた。イスワール家にかれこれ二十年以上仕えているベテラン侍女のバベットだ。

「ただいま、バベット。土産にワインを買ってきたんだ。あとで使用人たちで分けてくれ」
「あら、ありがとうございます。明日に障らない程度に、皆でいただきますね」

差し出されたワインを、バベットはうれしそうに受け取った。

「そういえば、先ほどイブリード王家より旦那様宛に書状が届きましたわ」

「イブリード王家……ああ、そろそろそんな時期か」

シェイルが思い出したようにつぶやく。

イブリード王国は、レディーナ王国の北部に位置する国だ。

これといった特色のない小国だったが、近年、真珠の養殖に成功し、世界各国への輸出を開始したのである。

「あまり嬉しそうではございませんのね」

「そういうわけではありませんが……いささか距離感の掴めない国ですから」

「それもそうですわね……」

レディーナもイブリード産真珠の主要な輸入国ではあるものの、公式な国交は皆無に等しいのが現状である。

というのも、イブリード王国は他国との外交に極めて消極的なのだ。

加えて入国管理が厳格で、王城から発行される入国許可証あるいは招待状がなければ、一歩たりとも足を踏み入れることは許されない。それは輸入業者であっても同様で、審査の壁は非常に高いことで知られている。

そんな閑ざされた国だが、五年に一度、諸外国の賓客ひんきやくを招いて舞踏会が開かれる。本日届いた書状はその招待状だった。

「こういった催し物の招待状は、本来であれば王城へ届くのが一般的かと思うのですが……」

広間のソファアに腰かけ、シェイルが内容を確認する。

「今回は一か月後の開催のようです。両陛下のご出席は難しいでしょうね。王太后様がお亡くなりになって、まだ日が浅いですし」

「シェイル様は、前回も出席なさったのよね？」

「ええ。ちょうど外交担当になって間もない頃でした。あのときは粗相そざうをしないようにと緊張してばかりで、終始固まって……」

にこやかだったシェイルの表情が、次第に険しくなっていく。

「何か、おかしいことでも書いてありますの？」

「いえ、書いてないんです」

そう言っ、シェイルは苦り切った顔で招待状をアニエラに差し出した。

アニエラは文章に目を通し、ぱちりと瞬きをする。

「あら、私の名前がどこにも記載されていませんわね」

「私が結婚したことは、あちらも把握しているはずです。隣国の、それも外交に携たづなわる文官の婚姻が、あちらの耳に入っていないわけがない」

呑のん気に相槌あいづちを打つアニエラとは対照的に、シェイルは不快そうに眉をひそめている。妻をない

がしろにされたことに、憤りを感じているのだろう。

「開催までには、まだ時間があります。すぐにでも確認の書状を送りましょう」

「その必要はありませんわ」

アニユエラはさらりと告げ、おやつのでらフルーツをつまんだ。バベットお手製のそれは、酸味と甘みのバランスが絶妙である。

「本当に、私に来てほしくないのかもしれませんが。こちらから催促して無理に席を作らせたら、お互いに気まずいでしょう？ それなら、素直に欠席したほうがよっぽど気が楽ですわ」

「ですが、あなたは私の妻である以前に、レディーナ王国の外交官だ。どんな理由があるにせよ、あちらのやり方には納得いきません」

なおも食い下がるシェイルに、アニユエラは頬杖をついて、ため息混じりに笑ってみせた。

「それでも拒否したいのかもしれませんが。何せ、私は『国潰しの女』ですもの」

「……それは、まあ、否定はしませんが」

そこはシェイルも言い返せないようで、気まずそうに目を泳がせる。

（ずいぶんと不名誉なあだ名をつけられたものかわ）

故国を離れ、レディーナ王国の人間となつてから早二年。

優秀な文官として国内外から高く評価される一方で、アニユエラを悪意に満ちた目で見る者も少なくない。

『ミジューム王国は、アニユエラの策略で崩壊したのではないか』

『なんの証拠も残さず王太子妃を暗殺した』

『自分を捨てた王太子に濡れ衣を着せて破滅させた』

そんな根も葉もない噂が、まことしやかに囁かれていたのだ。当の本人であるアニユエラは、なかば諦め気味に放置しているが。

（いろいろ気にしていたら、キリがないもの）

だが、これが原因で実務に支障が出るのだとしたら、今後は対策を考えなくてはならない。

「そういうわけですから、イブリード王国にはおひとりで行ってらっしゃいませ」

ひらひらと手を振ると、シェイルは困ったように肩をすくめた。

「わかりました。たしかに、最近あの国は黒い噂に事欠きませんからね。むしろ、アニユエラ様は行かないほうが……」

「それと、シェイル様」

以前からずつと言わなければ、と思っていたことがある。アニユエラはエメラルドグリーン瞳に不満を滲ませ、シェイルの鼻先にびしつと指先を向けた。

「私たち、結婚してから何年経つと思ってますの？ いい加減、私のことは呼び捨てにしてくださいな」

「すみません。その、どうにも慣れなくて……」

シェイルは伏し目がちに謝罪したが、すぐに顔を上げた。

「ですが、アニユエラ様だって私を様付けで呼んでいるではありませんか」

「えつ、それは……私は妻ですし、夫を敬称で呼ぶのは当たり前というか……」
思わぬカウンセラーを食らって、今度はアニエラが口ごもる番だった。

「それでも、ふたりきりのときくらいは名前で呼んでももらえると……私はうれしいのですが」
若干拗ねたような物言いでは返されては、断れるはずがない。

けれど、いきなりというのは、どうしても気恥ずかしさが勝ってしまう。

「……でしたら、あなたが帰国するまでの『宿題』ということにしましょう。舞踏会の一週間後は、私たちの二度目の結婚記念日ですもの」

「そうですね。しっかりと絆を深めてから、新婚旅行に行くとしましょう」

どこか緊張した面持ちで、ふたりは深くうなずき合う。

結婚してからこの二年、お互いに仕事に追われ続け、新婚旅行は完全にお預けとなっていた。それを見かねた国王から、『これは勅命である』となかば強制的に旅行を命じられたのである。

とはいえ、行き先はふたりで話し合い、国内の各地を順に巡ることに決めた。

王妃には『旅行とは名ばかりの視察ではありませんか？』と少し呆れられたが、それでもようやく、夫婦らしい時間が持てることに変わりはしない。

抑えきれない期待に胸を躍らせ、アニエラは内心かなり浮かっていた。



それから時間は瞬く間に過ぎ去り、出国三日前。

この日、アニエラは早めに仕事を切り上げ、シェイルの荷造りを手伝っていた。衣類などを詰めたものとは別に小ぶりのトランクを用意し、筆記用具や彼の愛読書を収めていく。

(インクは中身が漏れないように、蓋をしっかり閉めて……と)

ふたりで手分けして作業をこなしていると、部屋のドアを叩く音が響く。

「失礼いたします。イブリード王国から、奥様宛に小包みが届きました」

そう言って入ってきたバベットの腕には、小さな木箱が抱えられている。謎の贈り物にアニエラとシェイルは手を止めて包みに目を向けた。

「贈り主の名前……はありませんね」

「あら、てつきり招待状とお詫びの品かと思いましたのに」

「送り返しましょう。危険なものかもしれません」

「今度は差出人の欄に名前を書き忘れたのかもしれませんが。あちらの文官の方は慌て者のようです。とりあえず開けてみましょう」

アニエラは嚴重に結ばれた紐を解き、木箱の蓋に手を伸ばす。

蓋を開けると一通の手紙があり、その下に緩衝材代わりに丸められた紙が、隙間なく敷き詰められている。

紙の束をかき分けるように手を差し入れると、柔らかな絹の布に包まれた『何か』が姿を現した。
「あら、綺麗ですね」



布に包まれていたのは、一本のネックレスだった。

チェーンの部分にも小粒のダイヤモンドをあしらった豪華なデザインだ。

けれど、何より目を引くのは中央に嵌め込まれた深緑の宝石である。つるりと磨き上げられた表面が太陽光を反射し、鮮やかな六条の光彩を放っている。

その様はまるで、深い森の奥でひっそりとくらめく木漏れ日のようだ。

（スターエメラルドの一種かしら？　けれど、普通のものに比べて色が濃くて、透明度も格段に高いわ。ずいぶんと張り切ったお詫びの品ね）

これほど上等な石は、アニユエラも目にすることがない。ネックレスを太陽にかざしてまじまじと見つめてから、はたと気づく。

（で、肝心の招待状は？）

そのとき、封筒の中身を確認していたシェイルが小さく息を呑んだ。

「アニユエラ様、こちらを見てください」

差し出されたのは、下部に百合の紋章が型押しされた上質な便箋だった。

そこにはたった一文、『ぜひ、舞踏会でお召しください』とだけ記されている。

「謝罪にしては素っ気ないですね。イブリード王城でしか使われていない便箋のほうですけれど……」

季節の挨拶で何度か目にしたことがあるが、間違いないはずだ。

（何から何まで意味がわからないわね）

一向に届かない招待状。
差出人不明のプレゼント。

誠意もお詫びの気持ちもまったく伝わってこない手紙。
謎は深まるばかりである。

「やはり送り返しでしょう。何か嫌な予感が……アニエラ様？」

シェイルが顔を曇らせる一方で、アニエラは満面の笑みでネックレスを布に包み直し、夫の手へ押しつけた。

「私、今から王城へ休暇届を出しに向かいますわ。戻るまで、こちらを預かっていてくださるかしら？」

「……まさか、舞踏会へ行くおつもりですか？」

一瞬の沈黙を置いて、シェイルが尋ねる。

「もちろんですわ。これほど美しい贈り物をいただいたんですもの。お披露目もしないなんて、それこそ非礼にあたりますわ」

「ですが、招待状がなければ入国すらできません。あなたは罪を犯すことになるのですよ」

「それを承知で、私に来说いと言っているのでしょうか？」

「ずいぶんと手荒い招待だ。」

単なる嫌がらせにしては、金も手も込みすぎている。

「縁もゆかりもない私を巻き込みようとしている。それほどまでに、追いつめられているのかも」

「しかし、アニエラ様……」

「ですから、この目で確かめてきますわ。あの国で今、何が起きているのかを」

必死に思い留まらせようとするシェイルをよそに、アニエラは涼やかに答えた。

（どなたかは存じませんが、まずはお望み通り伺うことにいたしましたしょう）

第三者の思惑や悪意に振り回されるのには慣れている。

けれど、それすら利用してのける術を、アニエラはかつての苦い日々の中で嫌というほど学んできた。

「……わかりました。まずは入国の手立てを考えないといけませんね」

シェイルが顎を撫でながら考え込む。

「協力してくださいのね」

「言い出したらあとに引かないあなたのことです。せめて身の安全だけは保障させてください」

アニエラが期待を込めて尋ねると、シェイルは深く長いため息を吐き出した。

（やはり、持つべきものは最高のパートナーよね）

頼もしい夫の横顔を眺めながら、アニエラは満足げに笑みを深める。

そして三日後。

どんよりとした空が広がる出国当日の朝、ふたりを乗せた馬車はイスワール邸を出発した。
まだ人通りの少ない王都を駆け抜け、一気に北の国境を目指していく。

もともとイブリード王国に向かう旅人が少ないせい、進むにつれて道の舗装は目に見えて悪くなっていた。

（朝ごはんを抜いて正解だったわ……）

ぐわんぐわんと揺れる車内で、アニユエラは必死に酔いに耐えていた。強烈な吐き気から意識を逸らすため、あえて仕事について考える。

万が一の事態に備えて、ハンカチで口元をしつかり押さえることも忘れない。

「アニユエラ様、顔色が悪いですよ。大丈夫ですか？」

「ええ……なんとか……」

シェイルに力ない相槌を打ちながら、耐え抜くこと数時間。ようやく視界に入ってきた関所が後光を放っているように見えた。

（まずは第一関門だわ）

レディーナ側の関所なら難なく通り抜けられるが、問題はイブリード王国の関所だ。

「アニユエラ様、そろそろです」

「ええ、わかっていますわ」

短いやり取りのあと、アニユエラはシェイルとうなずき合った。

「これより先はイブリード王国領です。入国許可証の提示をお願いします」

厳しい顔つきの役人を前に、シェイルが鞆から許可証代わりの招待状を取り出した。

「こちらでよろしいでしょうか」

「拝見します。……失礼ですが、馬車の中も検めさせていただきますか？」

「かまいませんよ」

シェイルは顔色ひとつ変えずに馬車から降りると、さりげなく役人に体を寄せた。

「ただ、少し急いでおります。できれば手短に願いたいのですが」

差し出された手のひらで、数枚の金貨が鈍い光を放つ。役人は無言で掠め取るようにそれを懐へ収めた。

「……承知いたしました」

役人が車内を覗き込む。トランクが重ねて置かれているだけで、怪しい点は見当たらない。

「特に異常はありませんね。どうぞお通りください」

「ありがとうございます」

シェイルが礼を言つて車内に戻ると、馬車はすぐさま動き出した。

王都までは、一時間ほどかかる。しばらく走ったところで、シェイルは向かいの座席に重ねていたトランクを脇に寄せた。

「もう出てきても大丈夫ですよ」

そう呼びかけて空いた座席のシートをパカッと持ち上げる。すると、空洞になった内部からアニユエラが姿を現した。ドレスについた埃を払いながら、座席につく。

「やっぱり、賄賂は万能ですね。すべてを解決してくれますもの」

「イブリードの検問は金次第、なんて噂もありますからね。役人としてはどうかと思いますが」

同じ文官としては思うところがあるのか、シェイルが腕組みをして小さく唸る。

「何はともあれ、密入国成功ですわ。この調子でガンガン突き進み……うつ」

ガタン、と車内が大きく揺れる。

やはりこちらも滅多に使われない道なのだろう、整備が行き届いていないようだ。上下に激しく揺さぶられながら、再びアニエラの馬車酔いとの戦いが始まった。

揺れがようやく落ち着いたら頃、ふたりを乗せた馬車は王都へ滑り込んだ。

（ずいぶんとまあ、静かで過ごしやすい街ですこと）

国の中枢であるはずの大通りは、驚くほど人がまばらで閑散としている。

店は軒並み扉を閉ざし、街は規模こそ大きいものの、生気がなく寂れ果てているのが見て取れる。アニエラは車窓の外に広がる光景に目を留めていた。市場の様子を覗き見れば、その原因はすぐにわかることだった。

並んでいる品物はどれも価格が高騰していて、パンひとつとってもレディーナ王国より遥かに高値で売られている。この状況では誰もが財布の紐をきつく締め、飲食店とて高額な食材を仕入れてまで店を開く気にはなれないはずだ。

（文官たちは何をしているの？ このまま冬を迎えたら、この国は保たないわよ）

あまりにもひどい事態に息を呑んでいるうちに、馬車は王城に到着した。

左右対称の巨大な城門が、重々しい音を立てて来訪者を迎え入れる。広々とした馬車溜まりには、

すでに多くの馬車がところ狭しと並んでいた。

「アニエラ様」

「ええ、ありがとう」

シェイルの手を借りて馬車を降り、正面玄関へ向かう。すると、扉の脇に控えていた文官とアニエラたちの目が合った。

（第二関門よ）

ここからは勢いと力技で押し通すまで。

「レディーナ王国より参りました。本日は舞踏会のお招きにあずかり光栄に存じます」

胸に手を当てて一礼するシェイルに、文官は深々と頭を下げた。

「ようこそおいでくださいました。恐れ入りますが、招待状を拝見してもよろしいでしょうか？」

「こちらに」

シェイルから招待状を受け取った文官は、真剣な面持ちで内容を確認した。

「……イスワール様ですね。そちらの方も招待状のご提示をお願いします」

書面にひとりの名前しかないとを不審に思っただろう。首をかしげながら、隣に立つアニエラへ視線を向ける。

「私の招待状はこちらですわ」

「はいっ？」

自信たっぷりの様子で首元のネックレスを指差すアニエラに、文官は調子外れな声を上げた。

不穏な空気が満ちる中、緑の宝石が星型の光を鋭く放つ。

「招待状など送られてきてはおりませんもの。代わりに、このネックレスが届きましたのよ。ほら、証拠もこちらにありますわ」

畳みかけるようにアニエラが突きつけたのは、ネックレスに同封されていた例の手紙だった。

「……たしかに、これは我が王城の便箋で間違いありませんが……」

「おわかりいただけたかしら？ 持参して正解でしたわ。おかげで話が早いものです」

「で、ですが、こちらを招待状と認めるわけには参りません！ まさか、こんなもので入国なさったのですか？」

手紙とアニエラを交互に見比べ、文官が困惑しきった様子で問いかける。

（その調子よ。たやすく通されては意味がないもの）

真面目な文官で助かった。アニエラは隣のシエイルを一瞥（いちめつ）してから、一歩前に進み出る。

「そんなことより、早く会場へ案内してくださらないかしら？ こう見えて私、気が短いよ」

うつすらと笑みを浮かべて、さらにもう一歩。

有無を言わさぬ威圧感に、文官は思わず後ずさった。

「そ、そうおっしゃられますしても、正規の招待状がない方をお通しするわけには……」

「でしたら結構。あなたには頼りませんわ」

上品な笑みをふつと消し、アニエラは真顔に戻る。そして狼狽（ろうた）える文官など視界に入っていないかのように、悠然と城内へ足を踏み入れた。

「え……あつ、ちょ、ちよつと！」

一瞬（ぽうつ）呆然（ぼうぜん）としていた文官が、我に返って慌てて追いかける。

アニエラはかまうことなく、迷いのない足取りで奥へ突き進んでいった。

廊下を行き交う正装の男女は今宵（こよひ）の出席者（しゅっしき）だろう。彼らのあとに続けば、おのずと会場に辿（たど）り着けるはず。

「お客様、困ります！ お待ちください！」

アニエラと一定の距離を保ちながら、文官は取り付く島もないといった様子で必死に呼びかけた。

「申し訳ありません。私の妻は少々我が強く、一度言い出したら聞かないのです」

シエイルが白々しく謝罪を口にする。

「そちらのご事情など聞いておりません！ 早く奥様を止めてください！」

悲鳴まじりの声を背中で聞きながら、文官がちゃんとしてきていることを確認する。

ここではぐれてもらっては困る。

彼には、まだ大きな役目が残っているのだから。

そのまま真っすぐに進んでいくと、一際（ひととき）重厚な黒い扉が見えてきた。その隙間からは優雅な旋律が漏れ聞こえてくる。

（さあ、もう後戻りはできないわよ）

扉の前に立つ警備兵に軽く会釈をして、アニエラは両手で扉を押し開いた。

シャンデリアのまばゆい光が降り注ぐ大広間では、各国の出席者たちが華やかに歓談に興じていた。ふわりと広がるドレスは、まるで大輪の花が咲き乱れるかのように会場を彩っている。

「お客様っ！」

そのとき、一際大きな文官の叫びが会場に響き渡った。

出席者たちは一斉に言葉を失い、のびのびと演奏していた楽団さえもぴたりと音を止める。

（素晴らしいわ！ まさに完璧なタイミングね）

周囲からの視線を一身に浴びながら、アニエラは会場の中央を歩き出した。困惑する出席者たちが、さざ波のように道を開けていく。

自分自身に注目を集め、このネックレスを誰よりも目立たせる。

（これでよろしいでしょう、贈り主さん？）

これほどの危険を冒させてまで自分をこの舞踏会に導いたからには、必ずなんらかの意図があるはず。

カッソ、カッソ。大理石の床を叩く靴音の先には、一段と豪華なテーブルを囲む一団がいた。彼らこそがこの国の王家の人々なのだろう。

（まずはあなた方の反応を見せていただくわ）

中央にいる深紅のマントを羽織った男と視線が合った。

彼がこの国の国王なのだろう。ワイングラスを片手に呆然としている。

「そなたは……」

「お初にお目にかかりますわ。レディーナ王国より参りました、アニエラ・イスワールと申します」

問いかけに答えながらアニエラはドレスの裾をつまみ、たおやかな所作で頭を下げた。

誰もがその姿に固唾を呑む中、真つ先に声を上げたのは、国王の隣で優雅に腰を下ろしていた女性だった。ややくすんだ銀髪の上に、黄金のティアラが飾られている。おそらく彼女が王妃。

「まあ、なんですか？ 王族に気安く声をかけるなんて、礼儀知らずにも程が……」

「ところで」

アニエラはゆっくりと顔を上げながら、ネックレスにそっと指を添えた。

「私の招待状は、こちらでよろしいのですよね？」

直後、ガラスの碎ける鋭い音が会場に響き渡った。

王家の席にいた青年が、手にしていたグラスを床に落としたのだ。まるでこの世のものではない恐ろしいものでも目にしたかのように、アニエラを——いや、その胸元の輝きを見つめていた。

彼はネックレスを凝視したまま、その顔は氷のように凍りついている。

——どうして、それをお前が。

震える唇が音もなくそう動くのが、アニエラには手に取るようにわかった。

そのとき、慌ただしい足音が聞こえてきた。

振り返ると、先ほどの文官が「あちらの方です！」とアニエラを指差している。そして、アニエラは駆けつけてきた兵士たちによって瞬く間に取り囲まれてしまった。

「招待状をお持ちでない方を、このまま留めておくわけには参りません。ご同行願います」
兵士のひとりが厳しい面持ちで告げた途端、王女らしき少女が「はぁ!？」と椅子を蹴らんばかりの勢いで立ち上がった。

「招待状もなしに紛れ込んできましたの!? 信じられませんわ! お父様、あんな女早く逮捕してくださいまし!」

「う、うむ……」

娘に急かされるように、国王は右手を挙げて兵士たちに捕縛の合図を送った。

「……アニエラと申したか。いかなる事情があるうと、我が国の法を犯した以上は相応の処置を受けてもらう。どうか理解していただきたい」

厳格な言葉を並べながらも、国王の視線はやはり胸元のネックレスに注がれている。

(これが曰くつきなのは、間違いなさそうね)

アニエラは口元に薄い笑みを浮かべたまま、兵士へその手首を差し出す。女性であることを考慮してか、縄は幾分緩めにかけられた。

突如として現れ、瞬く間に連行されていく正体不明の美女。

華やかな舞踏会のにぎわいは一転、収まりのつかない不穏なざわめきへ変わっていく。

出口へ向かうアニエラの視界に、静かに佇むシェイルの姿が映った。こちらを案じるような眼差しに、アニエラはわずかに口角を上げ、悪戯っぽく片目を閉じてみせる。

「新婚旅行は、少し先になりそうですね」

すれ違いざまにそう言い残し、アニエラは悠然と会場をあとにした。



裁判が行われたのは、翌日のこと。

ステンドグラスから色とりどりの日光が法廷に降り注ぐ中、アニエラは被告人席に腰を下ろしていた。

背後には大勢の傍聴人。その最前列にはシェイルの姿もある。

(今日はいい天気ね。絶好の裁判日和だわ)

そんなアニエラののどかな思考を、ガベルの乾いた音が遮る。

「イブリード王国法第七十二条に基づき、被告人に判決を言い渡す。主文。被告人アニエラ・イスワールを、我が国の王城への不法侵入及び不正入国の罪に処し、これを有罪とする。……しかしながら、その動機に悪意はなく、招待状の不達という不手際も鑑み、刑を減じる。よって、被告人を一週間の禁固刑に処す」

裁判長が淀みのない口調で判決を宣告すると、傍聴席からは一斉にどよめきが沸き起こった。

非難や同情が入り交じる喧騒を背に、アニエラは深く落胆したかのようにうつむく。

傍目には、いかにも愚かで哀れな被告人に映っただろう。

……その唇が、美しい三日月を描いていることに、誰ひとりとして気づかないまま。もちろん、

夫だけはすべて演技であると認識していただろうが。

「刑期を終えるまで、あなたの身柄は王城でお預かりいたします」

「ええ。短い間ですが、お世話になりますわ」

閉廷後、すぐに現れた迎えの者に促され、アニエラは再び王城の門をくぐることとなった。

「ほら、来たわよ」

「うちの姫様より気品があるなあ」

「まあ、人は見かけによらないって言うし……」

文官や使用人たちの訝しげな視線を受けながら、どこ吹く風で廊下を進む。案内されたのは、城の隅に位置するゲストルームだった。

お世辞にも日当たりが良いとは言えない、薄暗い一室。

（サディアスの側妃だった頃を思い出すわ）

もともと、ミジウム王宮の側妃の部屋に比べると、調度品の質はこちらのほうが断然上である。ベッドの肌触りも申し分なく、これなら安眠が期待できそうだ。

快適な禁固生活を手に入れたアニエラは、満足げに椅子へ腰を下ろした。

諸外国の法律なら、ある程度は頭に叩き込んである。

このイブリード王国において今回のような事件に対する罪状は、禁固刑か罰金あるいはその両方が科せられる。さらに「招待状が届かなかった」とイブリード側の落ち度を主張することで、情

状酌量による減刑が勝ち取れると計算済みだった。

なおかつ、自分の高い者へ言い渡されるのはもっぱら禁固刑だった。金で解決できる罪など、彼らにとっては痛くも痒くもなく、罰として意味をなさないからである。

（ここまでは計画通りだわ）

王家のただならぬ様子からして、このネックレスには何か秘密が隠されている。

本来の招待状にはアニエラの名が記されていたはずだ。だが何者か——おそらくはネックレスの差出人によってすり替えられたのだろう。狙いはまず舞踏会の場でネックレスを衆目にさらすこと。そして、アニエラを罪人として拘束させることだ。

（この謹慎の間に、それを暴き出せてことよね。ちよつと無茶ぶりがすぎるのではなくて？）

何はともあれ最大の試練を乗り越え、王城に留まる正当な権利を手に入れたのだ。

（さて、まずは何から始めようかしら）

次の一手を練り始めたところで、小気味よいノックの音が部屋に響く。

アニエラが「どうぞ」と応じるやいなや、勢いよく扉が開け放たれた。

「初めましてアニエラ様！」

入室と同時に弾むような声を上げたのは、ふたつ結びの髪を元気に揺らす、アニエラより若干年下と思しき年若いメイドだった。

「本日よりお世話を仰せつかりました、カレンと申します！」

丸い眼鏡と鼻の頭に散るそばかすが地味な印象を与えるが、その表情は満開のガーベラのように

明るい。

「専属のメイドをつけてくださるなんてサービスがいいわね」

「本当はビクトリア様に仕えているんですけど、『一番の新人なんだから』って押し付けられちゃいました」

「あら、それはかわいそうに」

裏表のない明け透けな物言いに、アニエラは毒気を抜かれたようにくすりと笑った。

「あ、ご存じかとは思いますが、ビクトリア様は王太子妃様のことで……」

はきはきとした口調で説明しながら、カレンはアニエラの胸元を食い入るように見つめていた。「このネックレスが気になるのね？」

「あ、えへへ……すみません。あまりに綺麗だったのつい……お城の人たちも、あのネックレスの正体は何かって噂で持ちきりなんです。陛下たちもご存じないようだし、一体どなたがアニエラ様に贈ったんでしょうね？」

「そうね。ついでにその親切な贈り主の正体も、突き止めましょうか」

「ええっ!? ついでって……もしかしてアニエラ様、何か目的があつてわざと捕まった……とかですか？」

カレンの瞳が好奇心で輝く。「ぜひ首を突っ込ませてください」と顔に書いてある。

「まあ、そんなところね。でも、このことはふたりだけの秘密にしてくれるかしら」

「さてはこの王家の実態を探るおつもりですね！ ああ、あの……もしよかったら……」

「私を手伝ってくれるの？」

意図を汲んだアニエラが尋ねると、カレンは元気よくうなずいた。

「この不肖カレン、必ずやお役に立つてみせましょう！」

アニエラの両手をがっしりと掴んで、思い切り顔を近づけてくる。レンズが鼻先に当たりそうな距離に、アニエラは少し引き気味に苦笑した。

「そ、そう？　じゃあ、期待してるわね」

「御意！」

少しばかり手のうちを明かしたほうが、かえって動きやすくなるだろう。それに、このメイドはいい協力者になってくれそうな予感がある。

そう思ったのも束の間、おさげのメイドはすぐにはつと表情を強張らせる。

「でもアニエラ様、今は目立った行動は慎んだほうがいいですよ。来月、この国で国際会議が開かれることになっちゃいます、文官様たちがすぐくピリピリしているんです。ちょっとしたことで怒られたって、先輩たちも愚痴ってましたし」

「仕方がないわよ、急遽決まったんだもの」

カレンに渋い顔で注意を促され、アニエラは軽く肩をすくめた。

「そうなんですか？」

「当初は他国で開催されるはずだったのだけど、先日その国の国王が崩御なされたの。それで、ここ二十年開催されていなかったイブリード王国に、白羽の矢が立ったというわけ」

突然大役を任されたのである。準備の期間を考えれば、文官たちが殺気立つのも無理はない。

「さすがアニエラ様、お詳しいですね」

カレンがさっそくアニエラを持ち上げる。

「ええ。こう見えても、一応は文官ですもの」

「じゃあ、会議に出席なさるんですね！……って、逮捕なんてされちゃって大丈夫なんですか……!?」

カレンが心配そうに身を乗り出す。

このメイド、表情がくるくる変わるから見ていて退屈しない。

「会議には、もともと別の者が来る予定だったから心配いらないわ。このネックレスさえ届かなければ、私がこの国に来ることはなかったでしょうね」

そう言いながら、アニエラは星彩を放つ宝石に視線を落とした。

（そもそも、五年に一度しか外交行事を行わないというのも、少し妙な話だわ）

アニエラがこのイブリード王国を訪れるのは、今回が初めてだった。ミジューム国でサディアスの側妃を務めていたのはほんの一年足らずで、招待にあずかる機会もなかったのである。

（あなたとお話しできたら手っ取り早いんだけど）

人間の都合など知る由もないといった様子で、ネックレスは優雅にきらめいている。

禁固刑二日目、アニエラは配膳された朝食を食べていた。

少し硬めのパンに少量のジャム、一欠片^{かけら}のバター。それに葉野菜のサラダと質素なメニューだが、小食なアニエラの胃を満たすには十分な量だった。

食後の紅茶でひと息ついていると、「もうお済みですかー？」と弾んだ声が聞こえた。返事をするよりも早く、カレンが扉を開けて入ってきた。

「アニエラ様、食後の運動がてらお城の中を散歩しませんか？　ずっと部屋にこもっているのは体に毒ですよ。私が案内しますから！」

「気持ちはいれしいけど、勝手に出歩いたりして大丈夫なの？」

「よくわかりませんが、敷地内から出なければ多分セーフです」

「適当ねえ……」

呆れるアニエラを見て、カレンは少し悪い顔をした。

「ふっふっふ。城内を探索できる絶好のチャンスですよ」

「なるほどね」

有能な協力者を得られて何よりである。アニエラは不敵に微笑^{ほほえ}み、ティーカップをソーサーに戻した。

「というわけで、早く行きましょう！」

カレンが張り切った様子で食器を下げていく。あつという間に片づけを済ませ、ふたりは城内を歩き始めた。

イブリード王城はレディーナ王城に比べると小ぢんまりとしていて、内装もいたってシンプル。

ただし、廊下の壁面には名だたる巨匠による絵画がずらりと飾られている。

春の爽やかな湖畔や、月明かりに照らされた夜の街。色とりどりの絵画が並ぶ空間は、小さな美術館のようだった。

「こちらは王妃様のコレクションエリアです。少しでも傷つけたら一発で牢屋行きですから、絶対触らないでくださいね」

「これだけ集めるのも大変でしたでしょうね」

「ふふ、もつとすごいものをお見せしますよ」

そう言ってカレンに案内されたのは、渡り廊下に面した庭園だった。百花の女王である薔薇をはじめ、色とりどりの花が鮮やかに咲き誇っている。

しかしその中央には、なんとも奇妙なオブジェが鎮座していた。

真っ白な大理石に、多種多様な宝石をこれでもかと埋め込んだオブジェに飾られた噴水である。日光を反射して暴力的な輝きを放つ様は、ある種の毒々しささえ感じさせる。

「……こちらも、王妃様のコレクション作品なの？」

「いいえ。王女のキャサリン様が特別に大金をはたいて作らせたものです！」

あまりの悪趣味さに呆気にとられるアニエラをよそに、カレンが満面の笑みで答えた。

（キャサリン様——ああ、あのときの）

舞踏会の際、アニエラに対して露骨に憤慨していた少女のことだろう。たつぷりとフリルをあらわしたドレス姿を思い返し、アニエラは納得した。

「それじゃあ、次は食堂に行きましょうか！」

気を取り直して王宮内に戻り、廊下を歩き始めると、前方から数人の男たちがやってきた。

「どうも」

軽く会釈をして通り過ぎていく彼らを見送ってから、アニエラは何気なくカレンに尋ねた。

「ねえ、近々何か大きな催しでもあるの？」

「はい？」

「今すれ違った方たち、皆さん商人よね？ 胸元に国際連合商会のバッジをつけていたわ」

「よく見てますねえ」

自分の胸の辺りをとんと叩いて見せると、カレンは感心したように言った。

国際連合商会。

大陸の主要な国々が共同で立ち上げた商業組合である。あらゆる物資の流通を一手に引き受けており、大陸の生命線を担っていると言ってもいい。その経済的な面での発言力は大きく、一国の主であつても決して無視はできない。

「あの人たちはキャサリン様御用達の商人ですよ。キャサリン様は三日に一度のペースでサロンという名のお茶会を開いているんです」

「あら、よほどお茶がお好きなのね」

「そんなわけではないですか。アニエラ様だつてわかつてるくせに」

カレンはアニエラの皮肉をけけらと笑い飛ばした。

「うちのお姫様は、とにかく承認欲求が強いんですよ。取り巻きに宝石やワインを振る舞って、機嫌を取っているんです。それ目当てでサロンに参加するご令嬢もたくさんいるのだとか。ここだけの話、お金がいくらあっても足りないって……」

わけ知り顔で語っていたカレンの言葉が、ふいに途切れた。

突然フリーズしてしまったメイドに、アニエラは不穏なものを覚える。

「カレン？」

「そ、そういえば、アニエラ様に面会希望の方がいらっしゃるんです。のんびりお散歩してる場合じゃありませんっ！」

そう叫ぶなり、カレンはアニエラの腕を掴んで、全力で元来た道を引き返していく。

（この子、もしかして相当なドジっ娘……？）

仲間に引き込んだのは早計だったかもしれない。ふたりで慌ただしく客室へ戻ると、扉の前では顎髭を蓄えた初老の男性が、不機嫌そうな面持ちで待ち構えている。

「さ、宰相様……」

「アニエラ女史は仮にも罪人の身なのだぞ。許可なく連れ出すとは、何を考えているのだ！」

ぴしゃりと雷が落ちた。

「申し訳ありませんっ！」

宰相の鋭い叱責を浴び、カレンはびくりと背筋を伸ばすと、深く頭を下げた。

見かねたアニエラが助け舟を出すように、すかさず横から口を挟んだ。

「カレンさんを叱らないでくださいませ。私が無理を言って連れ出してもらったのです。ずっと薄暗い部屋に閉じ込められていては、気が滅入っってしまうものです」

「……お気持ちは汲みますが、節度ある振る舞いをお願いいたします」

「善処しますわ。それで、私に面会をご希望のお客様はどなたかしら？」

宰相の苦言をさらりと流して問いかける。すると、宰相の口から告げられたのは、意外な人物の名だった。

「アン様！」

部屋に入ってくるなり、その客人はアニエラのもとへ駆け寄った。

さらりとなびく艶やかな黒髪に、神秘的な光を宿した琥珀色の瞳。すらりと通った鼻筋と、少し垂れた目尻が柔和な雰囲気醸し出している。

大陸屈指の規模を誇るクレイラー商会。その会長の愛娘であり、アニエラにとっては気心の知れた友人のアリーシャだ。

同商会の従業員と結婚した現在は、自らも商会の運営に携わっている。

「お久しぶりですわ、アリーシャ様。まさか、あなたが来てくださるなんて思いませんでした」

「近隣での取引中に、新聞であなたの名前を見つけたのです。居ても立ってもいられなくて飛んできましたけれど、本当にお元氣そうで安心いたしました」

よほど心配していたのか、アリーシャはほっとしたようにため息をついた。

「ですが、不法侵入からの舞踏会乱入だなんて……アン様、さすがの行動力ですわ!」

「話せば長くなるのだけれど、詳細はあとでお手紙に書くわね」

一から説明していたら、面会の時間が終わってしまう。感服のあまり目を輝かせるアリーシャの前に、アニユエラはどこか決まり悪そうに苦笑いを浮かべる。

それはさておき、せっかく優れた審美眼を持つ友人が来てくれたのだ。今抱えている問題について尋ねてみることにした。

「アリーシャ様、このネックレスを見てくださらない?」

その瞬間、アリーシャの表情が商人のそれへ切り替わった。アニユエラの胸元にぐいと顔を寄せ、ネックレスをまじまじと見つめる。

「一昔前に流行したデザインですわね。そして、この中央の宝石……見事なスター効果ですわ。これほど深く鮮やかな緑色なのに光の筋が鋭く、石自体に濁りがまったくなく。これほどの代物、私は目にしたことはありません」

「これが一体どこで作られたものなのか、調べていただきたいの。できれば早めをお願いしたいのだけれど」

「……それはアン様がこちらにいらつしやることで、何か関係がありますのね?」

友人の問いに、アニユエラは肯定するようにニコリと微笑む。

「お任せください。アン様のお願いですもの。喜んでお引き受けいたします」

アリーシャは心得たようにうなずくと、懷からペンと手帳を取り出した。流れるような手つきで

ネックレスの意匠や石の特徴を書き留めていく。

そして手帳をパタンと閉じ、ふと何かを思い出したように小首をかしげる。

「ところで、シェイル様はどちらに? ご一緒だと思っていましたけれど……」

「裁判が終わるなり、レディーナ王国に追いつ返されてしまったの。ふたりでのんびり過ごせるせっかくの機会でしたのに残念だわ」

アニユエラは冗談めかしてそう答え、肩をすくめた。



アニユエラが友人と語らっている頃、少し早めの昼食をとるべく、広間には王家の面々が顔を揃えていた。

白いクロスがかけられたテーブルには豪華な食事が並んでいるが、一同を包む空気は暗く淀んでいる。

とりわけ王太子ディオンは、食事どころではないといった様子だ。カトラリーを置くと、憂いを帯びたため息をこぼした。

「父上、あれをいつまで放置するおつもりです? 僕がどんな思いで過ごしているのか、おわかりにならないのですか?」

ディオンは曇った表情のまま、額に手を当てた。

「やれやれ……この僕を悲しませるなど、愚かにもほどがあるよ」

「まずは落ち着け。それについては今、検討しているところだ」

皮肉交じりに問いつめる息子を国王が険しい表情で宥める。すると、王妃が手にしていたグラスをガチャンとテーブルに叩きつけた。

「これが落ち着いてなどいられるのですか！ 刑期はたったの一週間しかありませんのよ！」

「母上の言う通りだ！ 悠長なことを言っていて、例の件が露見したら僕の輝かしい未来は閉ざされてしまうのですよ！ 僕なくしてイブリードに明日はない！」

母親を味方につけたディオンは、ヒステリックに叫び立てる。

ふたりがかりでまくし立てられ、国王は内心で焦りを感じていた。なんとかつつがなく五年ぶりの舞踏会が進んでいると思っていた矢先、レディーナ王国の女文官が現れたのだ。

もはや、密入国などという些末な罪状はどうでもいい。

問題なのは、彼女が身に着けていたあのネックレスである。

（あのアニエラという女、まさかすべてを知っているのか？ だとしたら、我々の前に現れた意図はなんだ。……単なる揺さぶりか、それともほかに別の目的があるのか？）

次々と浮かぶ疑念は、シャンパンの泡のように弾けては消えていく。冷たい予感が背筋を駆け巡り、もはや料理の味などわからない。

「ディオンの様も王妃様も、少し冷静になったらいかがかしら。食事中に見苦しいですわよ」

それまで黙々と口を動かしていたビクトリアが、冷ややかに言い放つ。

その呆れたような物言いに、ディオオンがむっと顔をしかめた。

「何を他人事ひとことのような顔をしているのか。君の誇るべき完璧な夫の一大事だというのに……少しは焦る姿を見せたらどうだい？」

「騒いでも事態は好転しませんわ。……たかが一週間、されど一週間。刑期が足りないというのなら、延ばしてしまえばいいのです。罪なんて、あとからいくらでも用意できますもの。そうですわよね、陛下？」

どこまでも冷静で合理的な息子の嫁だ。落ち着き払った口調で同意を求められ、国王は無言で眉を下げた。

「ねえ、皆様、さつきからなんのお話をなさっていますの？ 私だけのけ者にされているみたいでつまらないですわ」

ひとり話についていけずにいるキャサリンが、不満げに頬を膨らませる。その唇の端には、スデーキのソースが少しだけついていていた。

「……」

キャサリン以外の四人は、無言で視線を交わす。余計なことを吹き込めば、事態をかき乱されるのが関の山である。

一同を代表して、ディオオンが突き放すように言い放った。

「政治の話だよ。僕のように選ばれた人間だけが携われる世界のね。お前には関係のないことさ」

「あら、それなら結構ですわ。難しい話は嫌いなんですもの。……ふはあ。ちょっと、ぼさつとしない

で早く注いでちょうだい！」

一瞬で興味を失ったのか、キャサリンは豪快にワインを飲み干すと、控えていたメイドを怒鳴りつけた。

あまりに短絡的だが、御しやすいという意味では助かる。国王はその品性のなさに頭を痛めつつも、ひとまず追及を免れ安堵するのだった。



人々のうごめく思惑など知る由もなく、透き通るような青空がどこまでも広がっている。

レディーナ王国へ帰国したシェイルは、国王夫妻にアニエラが拘束された経緯を報告していた。「ふむ……つまりアニエラは、例のネットワークを招待状と思い込んで舞踏会に出席したが、聞き入れられずに捕らえられてしまった、ということだな？」

レディーナ国王は落ち着き払った様子で、状況を短く要約した。

「はい。左様にございます」

「では、今すぐにでも身柄を引き渡すよう交渉すべきか？」

国王の口調に深刻な響きはない。その問いは、アニエラが自ら望んで捕まったのであろうという遠回しの確認だった。

「いえ、陛下のお手を煩わせるまでもございません。幸いなことに、先方も大事にするつもりはな

いとおっしゃっておいです」

「それは重畳だ」

すると、ふたりのやり取りを聞いていた王妃が、頬に手を添えて困ったように吐息をこぼした。

「ですけど、困りましたわね。ソフィーがあれば心待ちにしていたアニエラの帰還が、まさかこのような形になるなんて……」

幼い王女ソフィーにとって、アニエラは実の姉のように慕う、かけがえのない存在だ。その彼女が他国で捕らえられたと知れば、どれほど心を痛めるか。

王妃の憂いを含んだ言葉に、シェイルは深く頭を下げた。

「ソフィー様には、誠に申し訳ないことをいたしました。帰国の折には、速やかに拝謁させていただきますよう本人に申し伝えます」

「ええ。あの子には、アニエラは文官の仕事で派遣されていると説明していますから、くれぐれもよろしく頼みますわね」

最後にしっかりと釘を刺されて、国王夫妻との謁見は終了した。

次はアニエラの実家、ルマンズ侯爵のもとへ向かわねばならない。あの温和な義父のことだ。事情を聞くなり、その場で卒倒してしまうのではないか。

そんな懸念を抱きながら廊下を歩いていると、前方から思いがけない人物が軽やかな足取りでやって来た。

「よお、婿殿。しばらくぶりだな」

気さくな笑顔で手を振っているのは、アニエラの実兄だった。

「ドミニク様、なぜこちらに？」

「アニエラの件で、お前が来るだろうと思ってな。わざわざ足を運ばせるのも悪いし、こっちら出向いてやれと母上に言われてきたんだ」

「そうでしたか。それで……ルマンズ侯爵のご様子はその、いかがですか？」

「新聞を握りしめて青ざめていたが、母上がそばについているし、しばらくすれば落ち着きを取り戻すだろうさ」

妹と同じ紅い髪をさらりと揺らし、ドミニクが平然と言っているのける。

「それに、アニエラなら大丈夫だろ。どうせ何か企んで、こんなことを仕組んだんじゃないのか？」

「はい。お察しの通りです。警備兵に囲まれたときでさえ、ノリノリで連行されていきましたから」

当時の状況を聞いても、ドミニクは「ノリノリかよ」と呑気に構えている。

「あいつ、イブリード王国を潰すつもりかもな」

「もしそうなら、当分こちらには帰ってこないでしょうね」

さすがのアニエラもそこまでは考えていないだろう。義兄の軽口に、シェイルは苦笑しながら冗談で応じた。

第二章 王家の人々

禁固刑三日目。

アニエラは庭園を散策しながら、カレンとの他愛ない話に花を咲かせていた。

「デイオン様ですか？」

「ええ。舞踏会でお見かけしたときはずいぶんと理知的な方に見えたわ。さぞや、優秀な方なのでしょうね」

アニエラは、第一印象とはまるっきり正反対の感想を口にした。

「いやいや、あの方は『顔だけ』の王子様ですよ。とんでもなく女癖が悪くて、誰に対しても偉そうなくせに、執務の能力はからきし。外交だって本人はふんぞり返っているだけで、実際はほとんど通訳官任せだってもっぱらの評判ですし」

少しドジなのが玉にキズだが、やはり頼もしいメイドだ。

軽く水を向けてやるだけで、待っていましたと言わんばかりに内情をペラペラと話してくれる。

「国王陛下は、王太子を咎めたりはなさらないの？」

「陛下は悪い方ではないんですけど、とにかく誰に対しても甘くて威厳がなくて、君主としては少々困りものなんですよ」